

生涯学習社会における大学公開講座の意味

神 部 純 一
(滋賀大学)

1. はじめに

少子・高齢化の進行, また国立大学の独立行政法人化の波の中で, 今, これからの大学のあり方が, 様々な視点から模索されている。平成17年の中央教育審議会答申『我が国の高等教育の将来像』では, このことについて, 「大学は教育と研究を本来的な使命としているが, 同時に, 大学に期待される役割も変化しつつあり, 現在においては, 大学の社会貢献(地域社会・経済社会・国際社会等, 広い意味での社会全体の発展への寄与)の重要性が強調されるようになってきている」と述べている。今, 社会貢献の役割は, 大学の「第三の使命」として, 積極的にとらえていくべき時代となってきたといえよう。

こうした社会貢献の中心的な事業として位置づけられているのが「公開講座」である。筆者が以前, 滋賀県内の国公立大学の教員665名を対象に行った意識調査によると, 今後行うべき地域貢献として, 93.8%の教員が公開講座を実施することに「賛成」だと回答していた⁽¹⁾。また市民の側からも, 学習ニーズが高度化・専門化する中, 公開講座の開設に対する大学への期待はますます高まっている。

ところが, これまでの公開講座の実施状況をみると, そこには改善すべき多くの問題がある。例えば, 講座を担当する教員の意識に問題があることが

よく指摘される。上述したように、教員は、公開講座の必要性は認めながらも実際に担当するとなると、その多くが「研究や教育が忙しい」等の理由で余分な仕事だと感じているのである。また、そうした教員の意識の低さのためか、地域における生涯学習機会の中で大学が果たすべき役割は何か、といった公開講座の存在価値に関わる議論が、大学の中で深められることは少ない。結果として、趣味・教養的な講座内容が多くを占めることになり、地域の他の生涯学習機関が提供する講座との重複もかなりみられる。

こうした現状の中で、今、大学が公開講座を行うことの意味が問われている。本稿では、具体的な事例を踏まえつつ、これからの社会貢献としての大学公開講座のあり方について考えてみたい。

2. 生涯学習社会の中の大学公開講座

大学公開講座とは、「大学において、その教育機能や研究の成果を広く社会一般に開放するために、その大学の教員が中心となり、一般社会人を対象に講義等を行う事業の総称⁽²⁾」である。「平成15年度国立大学等公開講座開設予定」によれば、平成15年には95校の国立大学で1,728講座が開設され、その内容も多岐にわたっている。

一方、地方公共団体の教育委員会や社会教育施設などの主催する学級・講座等の事業をみると、教育委員会主催の学級・講座数は平成13年度で、167,400講座、公民館においては、341,212講座となっている（『文部科学統計要覧平成17年版』）。また生涯学習の機会を、公共の場に限らず、「カルチャーセンター」や「文化センター」等、民間の事業主体により開設されているものも多く存在する。平成13年11月1日から平成14年10月31日までの1年間に開設された講座の数は、138,534講座に及んでいる（『文部科学統計要覧平成17年版』）。

このように、今、地域に存在する多種・多様な生涯学習機会の中で、大学公開講座はどういう役割・使命を持つべきなのか。筆者は、公民館や教育委員会、あるいはカルチャーセンターによる講座と大学公開講座との棲み分けが必要であり、大学は、研究・教育の成果を存分に生かした機会提供により、

地域に対して独自の貢献をしていくべきだと考えている。このことに関して、平成8年の生涯学習審議会答申『地域における生涯学習機会の充実方策について』でも、大学公開講座について「地域住民の学習ニーズがますます高度化・専門化していることから、大学等には、一層、そこでなければ提供できない内容・水準の学習機会提供が強く求められている」としている。

筆者の所属する滋賀大学においても、生涯学習教育研究センターが設置された平成6年以降、大学公開講座が地域の中で果たす独自の役割とは何かという視点から、公開講座のあり方についての議論を重ねてきた。そして、土日に一般市民を対象とした講座を開講する「従来型講座」に加えて、新たに大学の正規の授業を市民に公開する「公開授業」を開講する方針が確認されたのである。大学の授業というのは、まさに大学でなければ提供できない独自の価値を持つものであり、単位の取得を前提とした授業内容は、近年の市民の学習ニーズの高度化に応えうるものである。また、大学は毎年多くの科目を開講しており、市民の学習ニーズの多様化にも十分に応じることができるのではなかろうか。

3. 公開授業の実施とその効果

(1) 公開授業の実施

上述した公開講座の中で、「公開授業」は、平成8年以前に国立大学において実施されることはなかった。そこで、滋賀大学は文部省（現文部科学省）に、公開講座として授業を公開するについての問い合わせを行うことにした。そして何度かのやりとりの後に、平成9年7月になって、「コマ数の半分以上の公開」という条件つきでの「公開授業」の開設が認められたのである。現在は、全回の授業公開が可能となっている⁽³⁾。滋賀大学では、平成9年の後期からこの「公開授業」を実施し始めたが、以後、多くの国立大学が、同様に正規の授業を公開講座として公開するようになった。平成17年度では、「全国国立大学生涯学習系センター協議会」に加盟している27大学のうち18大学が、市民に対して学部レベルの授業を公開している。「公開授業」は、現在、大学公開講座の主要な形態の一つとして認知されるようになっている。

(2) 公開授業の効果

1) 市民受講者に対する効果

「公開授業」の効果をみるために、平成14～15年度の公開講座の受講者を対象にアンケート調査を行った⁽⁴⁾。以下では、「公開授業」と「従来型講座」とを比較しながら、「公開授業」の効果を検証してみたい。

まず、「公開授業」と「従来型講座」受講者の受講動機をみてみよう。

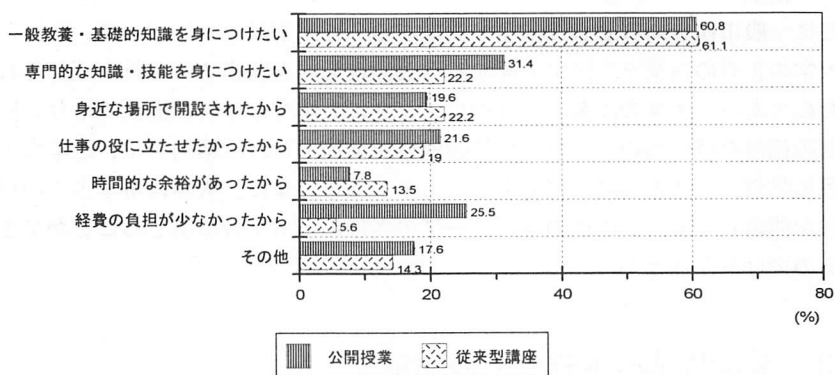


図1 公開講座受講者の受講動機（複数回答）

この2つを比較すると、「一般教養・基礎的知識を身につけたい」をあげた人の率をもっとも高いのは共通していたが、「専門的な知識・技能を身につけたい」と「経費の負担が少なかったから」をあげた人の率は、明らかに「公開授業」受講者の方が高くなっていた。「公開授業」受講者は、正規の授業に対して、「専門的な知識・技能」を身につけることができる場であり、またそれを安価で学べる、という印象を持っているようである。

ただ、「公開授業」の受講料が、「従来型講座」と比べて安いわけではない。平成14年当時の受講料は、両方とも「国立学校における公開講座講習料について」に基づいて徴収しており、むしろ回数が多い「公開授業」の受講料の方が高かったのである。しかし、「従来型講座」が、無料もしくは低料金で提供される公民館や教育委員会等の講座と比較されるのに対して、「公開授業」

は、これまで科目等履修生や聴講生にならなければ受講できなかった正規の授業を公開講座の料金で受講できる、ということが受講者のこうした印象につながったのではないかと考える。

「公開授業」受講者の受講後の満足度はどうだったのであろうか。調査の結果、「非常に満足できた」と回答した人の率は42.9%、「まあ満足できた」と回答した人を合わせると89.8%の人が「満足」していると回答していた。また、「講座での学習は、あなたが求めていたものを満たすものでしたか」の問については87.8%の人が、「講座での学習は、新たな学習への意欲をかきたてるものでしたか」の問については91.8%の人が、「公開授業」での学習に高い評価を与えていた。これら3つの問について、「非常に満足できた」、「非常に満たせた」、「まったくそうだ」と回答した人の率は、「従来型講座」の受講者の回答率を大きく上回っていた。

以上の結果より、受講者は、「公開授業」の受講を通じて深い満足感を得ていたことがわかる。特に、「新たな学習意欲の喚起」についての満足度はかなり高いようである。今後の受講ニーズについても、96.0%の人が「受講したい」と回答していた。

この高い満足度の裏には、授業自体に対する高い評価とともに、毎週大学に通って、若い学生と一緒に机を並べて学ぶことの新鮮さや楽しさがあることも付け加えておきたい。

2) 教員に対する効果

「公開授業」は、教員の授業にも様々な影響を与えている。

『おとなを教える』という本の中で、ジェニー・ロジャース (Jenny Rogers) は、成人を指導する際に、留意すべきいくつかのポイントをあげている⁽⁵⁾。例えば、その中で彼女は、「現実との関連づけ」や「経験を活用する」ことを強調する。成人は、実用的な知識・技能を身につけたいという強い動機を持っており、それゆえ学習と現実の問題とを結びつけることにより、効果的な学習が可能となる。また、よりよい成人学習では、成人の経験の利点を存分に生かしており、成人学生が自らの経験を話すようになればなるほど、それだけ学習を「内面化」させる可能性が大きくなる、というのである。

では、「公開授業」を担当した教員は、これらのポイントを授業にどう取り

入れたのか。そのあたりについて、アンケートの結果をみてみよう⁽⁶⁾。

アンケートでは、教員に「授業を公開する際に何か工夫をしたか」どうかについて尋ねているが、その結果、87.5%の教員が「工夫した」と回答していた。工夫した点としては、以下のことがあげられていた。

- ・出来る限り身近な話題の中から「会計」に結びつく部分を中心に開設しようと努力した。
- ・できるだけ図表を用いて、OHP等も併用し、ビジュアルでわかりやすい内容となるように努めた。また、参加者同志のディスカッションの時間を割り、交流が進むよう工夫した。
- ・資料の充実、パソコンによるプレゼン、講義内容の工夫（わかりやすい説明）。
- ・わかりやすくする。授業内容のポイントをはっきりさせる。パソコン利用など新しい機器を利用する。

以上の記述から、教員も成人を教えるという行為の中から、多くの事を学び、それが自らの授業の改善にも役立っていることがわかる。例えば、これらの記述の中には、「身近な話題」、「ディスカッション」、「授業内容のポイントをはっきりさせる」等、成人の教育において必要な要素が含まれている。熱心に学ぶ成人受講者を目の当たりにして、彼らのニーズに応えようと自分なりに授業方法を工夫している教員の姿が、そこにみてとれよう。こうした工夫は、成人学習者だけでなく、若い学生に対しても効果的であることは言うまでもない。

3) 学生に対する効果

最後に、社会人が正規の授業に参加することが、学生に対して与えた影響をみておこう。授業終了後、担当教員に、「公開授業」を行って有意義であったことを尋ねたのだが、その結果、以下のような回答が得られた⁽⁷⁾。

- ・カレッジ受講生の熱心な態度が 学部生のよい刺激になったようである。
- ・市民の方の学習姿勢が少なからず学生にも影響したと考えるから。

- ・社会人の受講態度が学生の模範になった。誰でも理解できるような授業にするよい機会になった。
- ・市民と学生のグループ討論を行い、お互いの意見を交流することができた。
- ・社会人独特の質問が出てくるので、それに受け応えする際に他の学生にとっても有益な情報を伝えることができる。

以上の記述から、社会人受講者の熱心な受講態度が、学生に好影響を与えただけでなく、彼らの豊かな経験が授業中のグループ討論や質問の中で生かされることにより、授業の中身が非常に豊かなものとなったことが読み取れる。牧野篤は、「県民への授業公開プログラム」を実施した結果を受けて、「市民受講者は一般学生向けの授業に参加することで、学生が大学という相対的に社会的な現実からは切り離された場で学ぶ中に、社会の一部を持ち込む、社会的な教育資源として位置づけることが可能⁽⁸⁾」であると述べているが、今後、市民参加を積極的に考慮に入れた授業計画を立てることで、「公開授業」は、学生の教育や指導面にも大きな効果をもたらすことになるだろう。

4. おわりに

以上、「公開授業」の実施を通じて、地域における大学公開講座の意味と効果についてみてきた。この実践を通じてみてきたのは、「公開授業」が、地域と大学双方にとってメリットをもたらすものだということである。すなわちそれは、市民の学習ニーズを満たしただけでなく、教員の授業改善を促し、結果として、学生の教育にもよい効果をもたらしたのである。

これは、これからの大学の公開講座を考える上でも重要な視点である。公開講座は、大学が地域に対して行う単なる社会サービスにとどまるのではなく、大学教員もそこから様々なことを学び、生かす姿勢を持つことで、大学と地域がともに発展していく実践となるべきである。今後、もっと多くの教員が、大学の研究・教育と地域双方のメリットが実感できる機会に関わることにより、公開講座に対する意識を変えていく必要があるだろう。さらにその意識変革の中で、公開講座の内容についても、個人のニーズに応えるものだけ

ではなく、特に地域課題に対して、研究・教育機関としての大学の特性を生かした講座がこれまで以上に生まれることを期待したい。大学には、地域の生活・文化・産業と深い関わりを持つ研究分野も多く存在する。公開講座は、大学にとっても、それらの分野の研究が地域と結びつきながら発展していく一つの契機となればよいと考えている。

また大学は今後、地域のリーダー養成等、人材の育成にも積極的に関わっていくべきである。その際、公開講座の評価として、単なる「修了証」ではなく「資格」を授与する講座は、学習成果を生かそうとする市民に大きな力を与える。例えば滋賀大学では、「公開授業」の制度を利用して、市民に「環境学習支援士」という大学独自の「資格」を与えるプログラムを平成17年より開始している。こうした試みは、地域における独自の価値を公開講座に持たせることになるだろう。

<注>

- (1) 滋賀大学生涯学習教育研究センター『大学教員の地域貢献に関する調査報告書—滋賀県国公立大学の場合—』2001, p. 57。
- (2) 日本生涯教育学会編『生涯学習事典』東京書籍, 1990年, p. 155。
- (3) 詳細については、「公開授業（半期1コマ全体）の実施について—実施までの経過と課題—」『滋賀大学生涯学習教育研究センター年報2001』滋賀大学生涯学習教育研究センター, 2002年, pp. 6-16を参照。
- (4) 「公開授業」受講者アンケートの標本数は128名, 回答者数は50名(回収率39.1%), 「公開講座」受講者アンケートの標本数は168名, 回答者数は145名(回収率86.3%)であった。
- (5) ジェニー・ロジャース著『おとなを教える—講師・リーダー・プランナーのための成人教育入門—』学文社, 1997年, pp. 59-81。
- (6) 神部純一「大学における公開授業の現状と課題—受講者と教員調査の結果から—」『滋賀大学生涯学習教育研究センター年報2004』2005年, pp. 55-56。
- (7) 同上報告書, pp. 56-57。
- (8) 牧野篤『〈わたし〉の再構築と社会・生涯教育—グローバル化・少子高齢社会そして大学—』大学教育出版, 2005年, p. 311。